

<平成21年度学部附属共同研究報告>

相手とかかわる力を育てる外国語活動の在り方 ～「英語ノート」の活用をとおして～

アダチ徹子¹・檜山克己²

1 研究の目的

附属小学校と学部の英語部会ではこれまで、相手とかかわろうとする積極的なコミュニケーションへの態度を育成する英語活動のあり方について研究を続けてきた。新学習指導要領において「外国語活動」が設定されたが、その目標の基幹は外国語を通して「コミュニケーション能力の素地を養う」とこととされており、相手とかかわろうとする態度の育成が重要なことには変わらない。一方、本年度より附属小学校でも使用し始めた「英語ノート」は、学習指導要領の目標を達成するためには大変有用な教材であるが、個々の学校や教師の意図や思いを盛り込むためには多少の「カスタマイズ」が必要でもある。そこで、本年度は、「相手とかかわる」という視点をより活動に取り入れつつ、「英語ノート」をうまく活用する外国語活動の授業のあり方について、これまでの英語活動に関する研究を基に考えていくこととした。

2 研究の概要

これまでの研究の成果を踏まえつつ、新たに「英語ノート」の教材分析を行い、「相手とかかわる力を育てる」外国語活動を作るために重要となる点を以下のように考えた。

- ・「英語ノート」中の活動には、必ずしも他人と関わることを必要としないものもある（CDを聞いてノートに記入するものなど）。それらの活動の意義は大切にしつつ、単元終了時には「相手とかかわる力」が育つような授業設計が必要である。
- ・これまでの学習形態の工夫は外国語活動でも応用できる。すなわち、全体での活動のみでなく、小グループでの活動も取り入れることにより、さまざまなかかわり方を体験したり、友だちと協力することのよさを感じさせたりすることができる。
- ・相手の言うことを理解したい、自分のことをわかってほしい、というようなコミュニケーションへの動機付けが高まるよう、タスク的要素を取り入れる工夫をする。
- ・「英語ノート」に提案されている活動を実施する場合も、子どもの実態に応じて適宜改変し、使用する英語もより子どもが使いたいという気になる表現になるよう留意する。
- ・相手と気持ちよく関わるために、和やかな表情、適度な声量、話すペースなどに気をつけさせる。また、相手に理解してもらうための配慮として、ジェスチャーや実物（絵の使用

¹宮崎大学教育文化学部

²宮崎大学教育文化学部附属小学校

などを工夫することの大切さも常時意識させたい。

- ・活動がより共感的・協力的に行われるよう、教師の目配りや言葉かけを工夫する。

平成21年7月2日に宮崎県教育研修センターが開催した課題別研修において、参観授業を提供することになったため、このような視点を盛り込んだ授業を計画した。授業で扱った単元は「英語ノート」のLesson 4「自己紹介をしよう」である。4時間配当の最終時であるため、自己紹介クイズをとおして、英語を使って友だち同士で積極的にコミュニケーションを図ろうとすることを目標とした。授業の流れの概要は、以下の通りである。

あいさつ キーワード・ゲーム 自己紹介クイズの進め方を知りグループで練習する
自己紹介クイズを行う ふりかえり 終わりのあいさつ

「人とかかわる」ことを重視するために、以下のようなポイントを工夫した。

- ・「クイズ」が、問題を聞きたい、聞かせたい、答えたい、など、自然にコミュニケーションをしたいという気持ちを作る良いタスクとなるよう留意する。
- ・実際のクイズの前に、グループで練習する機会を設ける。グループで協力して練習することにより、協力することのよさを感じ取らせることができる。また、クイズのヒントの出し方を話し合うことにより、聞き手に配慮したコミュニケーションの工夫（ジェスチャー、ヒントの内容、イラストの見せ方など）をグループで確認できる。
- ・練習やクイズの際に消極的な子どもや、不安を感じている子どもに、教師がタイミングよく適切なことばかけをすることにより、子どもたち同士のかかわりを支援する。
- ・ふりかえりにより、自分や友だちのよさ、英語でやりとりすることの楽しさなどについて見つめさせるとともに、次時にむけての気持ちを高めさせるようにする。

3 研究の成果

課題別研修での公開授業における工夫により、これまで英語活動で行ってきた「かかわる」ことを大切にする試みが、外国語活動でも生かせると確信できた。また、「英語ノート」を「カスタマイズ」する視点も、これまで附属小学校で行ってきた授業構成や教材作成に関する考え方、それに教師によることばかけなどの工夫や評価の視点なども、このままの方向で継続することができると考えられる。「ふりかえり」シートに子どもが記入した感想は、「英語が言えて楽しかった」といった英語スキルに関連するものよりも、「たくさんの人と話せて楽しかった」というものが多かった。この授業において、子どもが相手とかかわる機会を多くもてたと考えてよいのではないかと思われる。

4 今後の課題

残念ながら、本年度はやむをえない事情によりその後の研究を発展させることができなかった。来年度より、「英語ノート」の個々の単元を「相手とかかわる力」を育成するという観点からどのように具体的に授業として構成するかという、より細やかな研究が必要となるであろう。また、授業をふりかえり、次のコミュニケーション活動につなげる評価の在り方についても検討する必要がある。附属中学校とは情報交換を行っているが、引き続き、学習者の中学校におけるコミュニケーション能力の伸展に関して連携していきたい。